# 全国審査員からひとこと

◆平成22年11月23日、第70回全国教育美術展の全国審査を終えて、お寄せいただいたひとことです。

毎日の身近な出来事の中から、テーマが考えられれば、それはもっと子どもの目線に沿ったものになり、描かれるものも、多様なものになるのではないかと思います。しかし、毎年応募される作品は、テーマが似ています。現場の保育観の問題でしょうか。

子どもたちの楽しそうな気持が伝わってくるもの、そして、線がスッキリとして、色彩に透明感のあるものを選ばせていただきました。

**東京都中瀬幼稚園長　井口佳子**

今年も全国から楽しい絵がたくさん集まり選ぶのが嬉しく又苦労しました。幼児期の造形活動の中で大事なのは実際の体験や経験です。実際の感動、観察、発見等をふまえての絵がもっと出てきてほしい。

お話や子どもの頭の中で想像された、子どもらしく可愛い絵だけでは少し不満を感じる。子どものゴツゴツとしたエネルギーが溢れ出てくる保育や絵を望みます。

**京都市椥辻保育園長　片岡滋夫**

今回、なぜ子どもの成長を見守らないのだろうと考えてしまった。作品展や展覧会に向けた「作品づくり」をしている感じを受けた。子どもは線描が基本。なぜ色を塗るのか。なぜ後背を塗らせるのか。子どもの成長を願うなら、これらは余分なことだと思う。もちろん自主的に色を付けて飾ることもあるとは思う。しかし、指導者の意図の方が強く出ている。その点をもう一度考えてほしい。

**関西学院大学教授　清原知二**

## 年齢相応の作品を

今年集まってきた絵は、年中の絵が年長のような、年長の絵が一年生や二年生の絵のような作品が目立ちました。手がこんでいたり、画面の細部にまで気を配っている作品です。

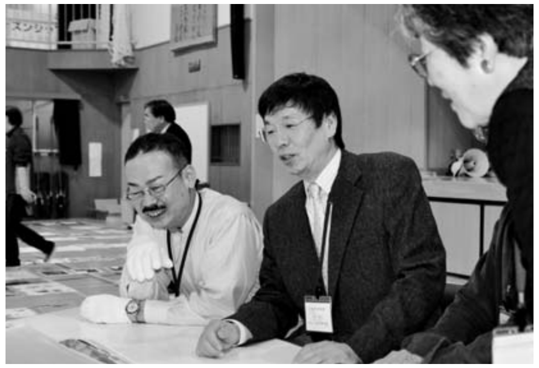
四～六歳の子どもたちの絵は、端的なものです。興味のあること、大好きなものをおおらかな線で描くものです。この時代にしか描くことが出来ない絵こそ大切です。年齢にふさわしい言動や作品に拍手したいです。

**十文字学園女子大学教授　平田智久**

## 題材を消化した作品

生活、お話、風景などといった題材を通して、子どもたちが自分の思いや願いをはぐくみ、それを表現に生かす工夫をしていました。一例として、単に見た風景を写すのではなく、「○○の感じがする風景」「夕焼けの風景」「窓からの風景」というように題材を消化している作品が多く見られました。自分なりの作品をつくりだすためにがんばっている姿が浮かんできました。

**大阪教育大学教授　岩﨑由紀夫**



## ぼくの絵、私の絵

子どもが何を描こうか思いをめぐらす。何をどの場所に描くかを考える。材料や用具を使って表し方を工夫する。「ああでもない、こうでもない」。「あ、いいこと考えた」。それまでに身に付けた知恵や方法を駆使して、自分の思いを実現させる。だから出来上がった時「喜び」が生まれる。指導は大切で必要だが、行き過ぎることで「ぼくの絵、私の絵」を奪わないでほしい。

**国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官　奥村高明**

## 豊かな思いと表現を大切に

全国から12万点も寄せられる大規模な審査会で、子どもたちの多様な表現に出会えたことに幸せを感じました。地域、学校、指導者によって、かなり表現が変わることに驚きを感じました。審査の過程では、子どもの声が聞こえてくる表現（楽しさ、喜び、思いが伝わってくるもの）を選びました。選ばれた作品を見ると、いずれも感性が豊かで、しなやかさを感じるものばかりです。技法の指導も必要ですが、まずその子がもっているよさを引き出し、豊かな思いと表現を大切にしていく指導の大切さを改めて感じた次第です。大変有意義な一日でした。

**大分市立神崎小学校教頭　中浦雅芳**

## 伝え、つなぐ

思わず笑みがこぼれる作品がある。その年齢ならではの想いと表現が同居した作品だ。画面の向こうに「どう、いいでしょ」と誇らしげに問いかける小さな表現者の姿が見えるようだ。そんな作品に出会う度、近くの審査員やスタッフに「いいですね」と持ちかけ、作品を巡る語らいを愉しんだ。表現の悦びは確かに伝わり、人と人とをつなぐ。終日、幸せな時間を過ごすことができた。

三重大学教育学部附属小学校
主幹教諭　三輪辰男

## 最初に作品ありきでいいの？

結果にしか興味を示さない大人にとって大事なのは、完成された作品のようです。けれども、子どもは、それまでの過程をもっとも楽しみます。なぜなら、そこに創造の意味があることが直感的にわかるからです。学習指導要領も過程で発揮される資質や能力を大事にしています。

方式化された絵画指導は、最初に作品ありきです。そろそろそんな指導はやめにしませんか？

東京都新宿区立花園小学校
主幹教諭　横内克之

## 新しいものに出会い探索する冒険心

落書きや地面を彫り描く行為に、子どもは熱中します。皮膚感覚から全身の感覚、知覚を総動員して変化を感じ探索します。新しいものに出会い探索する時や興味を持って見つめ考える時にのみ「シータ波」という脳波が発生します。自分の世界の表現は、お手本の模倣ではなく、イメージを認め受け入れ引き出すことで創り出される。技術は、経験から必然的に習得されます。

東京都立調布特別支援学校
教諭　石丸良成

全国各地から寄せられた作品は、子どもたちがそれぞれのメッセージを込めて仕上げたものだと思います。伝えたかったものは何なのだろう？　楽しみながら描いたのだろうか？　傍らで、先生たちはどんな指導をしたのだろう？　そんなことを想像をしながら審査をさせていただきました。

この美術展に関わる皆さんの情熱と真剣な想いを、放送を通して、全国に届けたいと思います。

NHK制作局青少年・教育番組部チーフプロデューサー
桑山裕明

## 次の「創造の扉」に

日本で最も伝統のある美術展審査に係ることができ、期待一杯で作品を拝見いたしました。特に中学生の作品は、時間数等様々な問題を抱え厳しい現状にあるにもかかわらず素晴らしい作品が多く、学年が進むにつれ感性と知性が深く響き合った作品が目を引きました。美術指導者は勿論のこと、この作品を見た全国の生徒が、この作品を「創造の扉」にしてほしいと願っています。

青森市立古川中学校校長
久保田公浄

## 題材に広がりを

小学校高学年と中学生の作品を中心に審査しました。主題を意識しながらも、高学年は感覚的な捉え方や表し方が、高まる客観性を上回ったり混合したりして醸し出される楽しい作品を選びました。中学生は、表面的な描写力よりも対象や自己を深く見つめ心を込めて描いた作品がよいといえます。共通の課題は、題材に広がりがほしいことです。題材開発や学習内容等の研究が望まれます。

信州大学教授
橋本光明

## 全国学校賞の審査にあたって

中学校の学校賞の審査をしました。複数の作品を見ていると、訴えかける力が強い作品がいくつか目にとまります。それらの作品は、題名に作者の思いや意図が表されたものが多いと感じます。例えば、「晴れの日の踏切」「私の好きな場所」など、単に「踏切」などの描いた対象ではなく、「どのような○○を表現したかったのか」が明確です。そのような作品に魅力を感じました。

国立教育政策研究所教育課程研究センター
研究開発部教育課程調査官
村上尚徳

## 形と色彩を楽しむ

形はありさまを描きだし、明暗は量感を、色彩は気分を添えます。そこに材料の実質が加わると力強さと意外性が生まれます。こうした絵画表現の知恵を先生方はよく承知しておられて、子どもたちの表現や造形は大変華やかに力強くなっています。

でも、色彩よりも技法の多様さに偏り、気持ちよりもアイデアを競っているように見えます。描くことは形と色彩を楽しむことだと思います。

筑波大学名誉教授
山本文彦